

# キャンパスを歩き、街を訪ねる。

獣医病理学研究室の中山裕之先生とヤンソン像を眺め、  
生物測定学研究室の岩田洋佳先生と根津の居酒屋を覗く。



## 踊る獣医学者の帰還

ヤンソン像

ヨハネス・ルードヴィヒ・ヤンソンは明治13年から35年まで駒場農学校や東京帝国大学農科大学で教鞭を執り、動物病院や獣医学の発展に力を尽くした人物。「22年間教壇に立ち、日本人女性と結婚してこの国に骨を埋めたヤンソン先生は、半生をかけて日本獣医学を育ててくれた大恩人」と中山教授は話す。



**大** 寒の雨降るなか獣医病理学の中山裕之教授とヤンソン先生に会いに行く。といってもそれは動物医療センター前に置かれたブロンズ像だ。

この胸像、もともとは駒場農学校にあったが、昭和10年、一高とのキャンパス交換でこの弥生に移設され、以来農学部3号館のエレベーターホールの片隅にひっそり立っていた。これを見て昨年、獣医学・応用動物学同窓会（優駿会）が立ち上がり修復と移設を計画。動物医療センター前に場所を定め、9月に引っ越し、11月にお披露目の除幕式が執り行われた。

しかし、動物医療もずいぶん変わった。ヤンソン先生が教えていたころの獣医学といえば主に馬が対象だったが、今日動物医療センターにやってくる動物たちの大半はペットの犬や猫だ。センターの一階にはそうした「患者」のためのCTスキャンやMRIも設置されている。「年間の画像診断件数は約1,500件、そのほかに抗がん剤治療や放射線治療も行っています」と話すのは神経科を担当する松木直章教授。ヤンソン先生が聞いたら、まさに隔世の感だろう。

ところでこの髭の紳士、獣医学のほかにも教えたものがある。時の農商務大臣西郷従道に請われて、かの鹿鳴館で日本の婦人に社交ダンスの手ほどきをした。獣医学者が淑女たちを相手にどんなステップを披露していたのか、ちょっと覗いてみたかった。雨に濡れる胸像にはどことなく、粋なダンディズムもにじんている。

Dr. Johannes Ludwig Janson,  
the father of veterinary medicine  
in Japan and a dancing dandy.



松木直章教授(左)と中山裕之教授(右)

